
ココロノヤミ

ぬこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ココロノヤミ

【Nコード】

N4280B

【作者名】

ぬこ

【あらすじ】

いいこと、わるいこと、それってとってもあいまいで、わからない。だから、みてみたいの。

1

いい子にしていれば、いい事が。

よく、いうよね？

でも、キミはどう思う？

不公平だって、思ったことは無い？

テレビのニュース、学校。

絶対、そんなことないって、不公平だって、そう思ったことはない？

いいこには、イイコトが。

じゃあ。

悪い子には、ナニがあると思う？

イイ、と、ワルイ。

区別って、難しいよね？

時々、アイマイで。

時々、ワカラナイ。

時々、イイ、が、ワルイになることもあるよね。

人は死んだら、悪い人は地獄へ行くって、聞いた事無い？

でも、じゃあ、「イマ」は？

ボクは、「イマ」が知りたい。

キミは、どう？

だから、ボクは見ているんだ。

「百聞は一見にしかず」っていうだろ？

「きかず？」だっけ？

まあ、どっちでもいいんだ。

ボクはただ見て、ちよつとささやかなお礼をするだけ。

怖がらなくっていいよ。

モチロン、ボクは神様なんかじゃあ、ない
だからって、悪魔でもない。

ああ、ボクの名前は気にしなくていいよ。

キミが悪い子じゃないのなら、
ね。

学校、行きたく、ない。

どこで、こうなっちゃったのかなあ。

どうして。

どうして？

普通に学校楽しい頃もあったのに。

誰に言えばいいんだろう。

先生に、言えない。

親に、言えない、ていうより、言いたくない。
どうしたらいいのなんて、言えないよ。

心配かけたくないし、・・・・・・そんなんじゃ親がかわいそう。

電話相談室。

——ちがうもん。私、いじめられてるわけじゃない。

そんな深刻じゃないもん。
ちがうよね、ちがうよね？

そこまでしなくちゃいけないなんてこと、ないもん。

それに、そういう話なんて、・・・したく、ない。

「今回のトップは、桜井だ」

先生が、期末の結果を告げる。

あたしは、当然名前を呼ばれる程なんかじゃ、ない。
毎回いつも、トップは桜井君。

「さすがだよな。桜井行ってる塾どこだっけ？」

「駅前だったっけ？」

「いや、ヤマがあたったんだって」

笑いながら話をしているクラスメートが視界に入らないように、
じつと下を向く。

あたしのテスト結果は、良くも無ければ悪くもない。

っていうよりは、悪い方なんだけど：

「河合」

「・・・はい」

「お前、答え書くとこずれてたぞ。それなければもうちょつと点数とれてたのにな」

先生がそういうと、クラス中に笑いが巻き起こる。

「一つずつずれてなかったらもつと点数良かったのにな。しっかり確認しろよ」

「・・・はい」

「河合、ボケすぎー！」

「仕方ないじゃん、河合だもんっ」

「中身もズレてるしねー？」

こういうとき、笑って何か言えたら、きっと違うんだろうかって思う。

でも、そのタイミング逃して、「そういうキャラ」じゃなくなったら、その機会はいつになるんだろう。

黙って、うつむくしか出来なくて。

最初にそうじゃなかったら、きっと、違ってたのかな。

桜井君みたいに、頭も良くて人気があったら、きっと毎日楽しいのかな。

いつも、穏やかで委員会だとかあると大抵選ばれて。

学校でも有名な彼。

学校が終わると毎日塾に行っているみたい。

塾にいけば、私も頭良くなれるかなあ。

でも、塾でもまた、お友達できなかったら。

そしたら、ココが増えるだけだ。

どうやったら毎日楽しくなるのか、そういうこと教えてよ。

頭も良くなれて、可愛くなれて、人気者になれるには、どうしたらいいの？

キンコーンカーンコーン

夕方の空に響く、終業の鐘。

ここ井川中学は、建てられたのも古く、それに伴って校舎自体も老朽化が激しい。

もうあと数年もしたら建て直しをとの声もあるが、生徒数の減少も著しく、予算の都合などもあり、平行線のやり取りが定期的に時期を置いて繰り返されているのだ。

部活動に向かう生徒でやややかな校庭を抜けて、校門へと向かっていくのは。

桜井君だ。

きっと、これから塾なんだろうな、なんておもって見ていたら、ふと目が合う。

「ああ、河合さん。さようなら」

「…さよなら」

ほんの少し、口の端を上げて別れの挨拶を交わす。

「今日のテスト、残念だったね。また頑張ろう」

「ありがとう、桜井君も次も頑張ってるね」

黒いカバンを肩に抱えて、そう言う足早に去っていく少年、桜井。

彼が背を向けて歩き出した後もほんのり笑顔を浮かべて、また下を向いて歩く少女、河合。

「河合、なに笑ってるのー？キモイんだけど」

「ほんと、超キモイ」

ほんの一瞬の幸せな気持ちが一気に冷え切って、ぐっと唇を噛む。

「つーか、シカト？」

「キモイヤツにシカトくらっちゃったよ、ひどくない？」

「何してるんだ、同じクラスなんだし、あんまり酷い事いうなよー？」

校門の前で足を止めた桜井が、振り返ってそう叫ぶのが聞こえる。

「えー、こちらがシカトされてたんだよー？」

「そうそう、こちら超カワイソー。桜井君、慰めてよー」

「…さよなら」

下を向いて、ぼそっと呟いて、足早に走り出す少女。

キモイなんていわれて、なんて返事したらいい？

シカト、してるわけじゃないよ、ただ、言葉がでないだけだよ。
助けてくれた桜井君に御礼も言えなくて、走るだけなんて、ほん
とに嫌だ。

でも、泣いてるの見られるのは、——もっと嫌。

みつともなくなんか、ないもん。
いじめられてるわけじゃないもん。

いじめられてなんか、ない。

そんなとこ桜井君に見られたくない。

ふうん、いいねいいね？
青春ってカンジだよね？

ボクにはあんまり経験ないけどね。

これが「普通の中学校」ってヤツなんだろうね。

クラスの人気者と遠いところにいる女の子ってヤツかな。
夕方は暗くなるのが早いからね、さて、どうしようかな。

ねえ、キミなら、どうする？

せっかくここに居るんだし、どっちをみにいこうかな。

んー。

ここはやっぱり、女の子だね。

夕方の帰り道は見届けてあげようか。

川沿いの土手を通り、夕陽が川に映ってまるで太陽が二つあるかのような景色。

あたりは夕暮れの、僅かに冷たい空気。

表通りのにぎやかな通路とはうってかわって静かな土手。

その土手の下、川ををまたいでかかっている橋の手前には二本の大きな木。

足元に気をつけながら、小走りで土手を駆け下り、少女の背を三倍したかというほどの高さの、その木の真下で、少女は足を止める。

「今日はどうだった？」

足元の、小さな猫に声を掛ける。

学校指定の黒いカバンから小さなビニール袋を出すと、その中身を地面に静かに開ける。

「ほら、いっぱいいたべるんだよ？」

ゴロゴロと喉を鳴らしながらもカリカリと音を立てて夢中で少女が地面にまいたエサを食べる、小さな猫。

少女はそれを見て、しゃがみこむとじっとその様を見つめる。

ひゅううとふく冷たい風に、ほんの少しめくられるスカートの裾を膝の下に織り込む。

「明日、ダンボール持ってきてあげるからね。中に古いセーター入れてあげるからそこにいるんだよ？」

返事は無く、ただ一度少女の顔を見上げるとその膝に体を摺り寄せて、またエサを食べる猫。

静かなこの川辺の空気は冷たいが、表通りにいるよりは静かだ。

「それじゃ、もう行くね。元気にしてるんだよ」

もう一度、猫を撫でて立ち上がりスカートの裾の泥を軽く払う。と、視界に入るのは、大きな犬。

「野良犬？」

やや痛んだ毛並みと歩き方からして、老犬なのだろう。

少女から少し離れたところでごろん、と横になると、微かに鼻を鳴らす。

「・・・大丈夫かな」

猫と、犬と。

喧嘩したりしないのかな？

どっちも野良なのかな。

しばらく立ったまま様子を見てみると、足元で餌を食べていた猫が、ふわぁっと大きくあくびをして、老犬の側へ。

そして、そこに腰を下ろすとゆっくりと毛づくろいを始める。

「野良なのに、仲良しなの？」

犬がうつすらと目をつぶり。

寄り添うようにして猫が座り。

「普通、喧嘩しちやったりしない？ 仲良しなの？」

ぱたん、と犬の尻尾が軽く揺れて、それに釣られて返事をするかのように猫の尻尾も軽く一度上がり、また下へ。

そっか、こう寒いと一匹じゃ辛いもんね。

おじいちゃんと、ちっちゃいこだから喧嘩にならないのかもしれない。

一人じゃないなら、良かった。

一人じゃ、寂しいもんね。

「それじゃ、またね。気をつけるんだよ」

そういつて、二匹に手を振ると、帰路を辿る少女、河合。

うん、夕方だしね。

遅くなるとおうちの人心配するから、もう帰るほうがいいよ。

ここからならキミの家までもうすぐだしね。

キミも気をつけて帰って。

古いセーターとダンボール、きつとあったかいだろうね。

今度ボクにもくれたら嬉しいな、セーター。

それじゃ、せっかくだから桜井君の様子でも見に行こうかな。

きつと、塾でお勉強が終わった頃だよな。

できれば女の子についていきたいんだけど。

いいよね、女の子。

冬の夕暮れほんのりムード、冷たいほっぺとか、スキなんだけどな。

ま、いこっか。

「今回のトップは佐川だ」

・・・またかよ。

「佐川、よくやった。このままいけば推薦は問題ないだろう」

「さすが佐川だよな」

「あいつ、他の塾もいってるんだろ？」

「井川中の誰かさんとじゃ、レベルが違うってやつだよな」

「聞こえるって」

「いんじゃない？」

：十分聞こえてるよ。

何が言いたいんだよ。

お前らが行ってる中学だって、たいしたことないじゃないか。
ただ、金がかかる私立っていうだけだろう。

お前らに負けた訳じゃない。

：イライラする。

笑うなよ。

早く、受験が終わればこいつらとも会うことなんかないはずなんだ。
だ。

とっとと終わらせてやりたい。

いつか、お前らを使う立場になってやる。

「二位は、桜井だ。頑張ってるな」

「…はい」

「万年二位の桜井クンってやつ？」

「名前呼ばれるだけ惨めだよなー、一位にはなれないっていうさー」

「毎日毎日頑張ってるんじゃない？それで二位とか」

「必死で頑張って、勝てないとか気の毒すぎ。だったらやらない方がいいじゃん」

——…うるさいよ。

あー、桜井君、今回も負けちゃったんだね。

この塾、レベル高いらしいし？

どこでも一番になるのって、大変だよねえ。

学校では一番なんだし、十分頑張ってると思うけどなー。

河合さんメロメロでクラクラだったよ？

いいね、ボクも練習してみようかな、メロメロスマイル。

口の端上げて、…って、あんまり奥歯噛んだら割れない？
歯医者さんって、キューーンって音がボクニガテなんだよね。

桜井君歯医者さんスキ？

でもビジンのおねえさんにキューーンって、メロメロだよね。
ボクちよっとときめいちゃうさ。

ねえ、気づいてる？

ママがくれたお守り、カバンの下で潰れちゃってるよ？
持たせてくれたおにぎりも、ほら。

配り終え、一通り確認が終えるとチャイムが鳴り、講師が生徒に
告げる。

「それじゃ、皆気をつけて帰るように」

席をすぐ立つものも居れば、そのまま講師に質問を、と残る生徒
も。

既に一般家庭の夕食時間には遅い、夜21…30を過ぎた辺り。

「あー、今日の犯人誰だったんだろ」

「ビデオとってあんだろ？」

「あるけどさー、まちきれねーじゃん」

「俺ん家よって見てく？」

有名な塾なだけあって、ここに通う生徒はあちこちの学校から集
まってくる。

少年、桜井の火曜井川中学は学区内ではないため、通うのに一時間。

他にも同じ時間をかけて通うものもいれば、近いものも居る。

入塾試験をクリアし、そして成績別に管理されるこの塾。

当然レベルは高い。

志望校合格率90パーセントを誇る名門なだけあって、講師も一流であり、90パーセントの合格率を維持するべく、生徒を選びかつ適切な進路相談をというモットーを貫く。

少子化の生徒不足が嘆かれる中において、それでも譲らないその体制は人気でもあり、批判でもあり。

しかし、「誰でも入れるわけではない」という選ばれた感覚というものが羨望の的になるのは今も昔も変わらない。

帰って、勉強しないと。

次回こそ、あいつらを見下してやる。

「桜井、飯くってかねえ？」

「いや、今日は帰るよ。明日朝連あるからさ」

「あー、んじゃまた今度な」

わざわざ、同じ学校のヤツがない塾を選んだのは、正解かもしれない。

佐川が来るまでは、「此処」も、俺の「場所」だったのに。

声をかけてきた塾仲間の手を振ると、教室を後にする少年、桜井。

へーえ、そっか。

努力家なんだねえ、桜井君ってば。

学校では優しくて優等生の人気者。

うんうん、努力して頑張るっていいよね、ボク、スキよ。

あ、でもオトコノコがスキってことじゃないんだ。
残念？

…っと、河合さんはそろそろお風呂かな。

いいよね、女の子の入浴シーン。

わくわくしちゃうよね？

せっかくだから、ボクそっち見に行こうかな。
寒いし、あったかいお風呂、たまらないよね。

「明日も学校、やだなあ…」

また、明日もテスト返しだろうし。
修学旅行の話とかも、やだな。

グループ分けとかなければいいのに。

桜井君は、誰とグループ入るのかな。
一緒に、なんておもうだけ、無駄だよな。

どうせ一緒になれたって、話なんて出来るわけがないもん。

誰にでも優しい、桜井君。

人気者で、頭も良くて。

憧れるけど私は桜井君にはなれない。

あーあ、残念。

入浴剤って、お肌にはいいかもしれないけど、ボクにはつまらないね。

せっかく湯気で雰囲気バッチリなのに、なーんにもみえやしない。

こう、成長期の少女の入浴。
たまらないよね。

せっかく急いで戻ってきたのに、残念。

河合さんは、桜井君が好きなんだ？
頭も良くて、優しくて、人気者で？

つまり、完璧ってやつ？

人間なの？

「ほら、あんまり浸かっているとのぼせちゃうわよ？」

「はい」

「お風呂上りに、オレンジジュースあるからね。早くでておいで」
「ありがとー」

あがろっかな。

外、寒そうだしやっぱり今夜ダンボールもっていつてあげよう。
風の音凄しいし。

お風呂でしっかりあったまったら、すぐ戻ってくればいいもんね。
オレンジジュース飲んだら、急いで走っていかなくちや。
こんな寒い夜にあんなちっちゃいこが一人きり、絶対寂しい。

…うちに連れてきてあげられたらいいのにな。

ひゅうひゅう、と風の音が窓越しに聞こえてくる冬の夜。
立ち上る湯気が暖かい風呂場とは別に外の寒さが伺える。

反響して響く少女の声は、学校では発した事がないほどはつきりと明瞭で大きい。

それに気づいてか、小さく溜息をつく、少女は湯船から体を起こす。

うんうん、早くあがりなよ。

そのほうがボクも嬉しいな。

最近の子はやせすぎてたりして面白くないんだけど、あれ、気にしすぎだよな。

やっぱりある程度こう、でるところでたほうがね？

「湯上りに、けむる柔肌、おいしそう」

ほらほら、一句詠できた。

けむる、けぶる、どっちだっけ？

けむるって、ツルツルな予感。

けぶるってセクシイな感じ。

うん、やっぱり入浴シーンは詩人にさせるね。

冬の湯上りピンク肌とか、いいね。
ぐっとくるよね？

「ママ、ちょっと外でてる」

「寒いわよ？明日にしたら？」

「うん、でもすぐ戻るから」

「ほんとにすぐ戻ってくるのよ？」

「うん」

体を拭き、着替えると居間でテレビを見ている母親に声を掛ける少女。

心配そうに視線を送ってくるのに笑顔で応えると、慌しく部屋へ戻り、荷物をまとめる。

セーター、一枚だけじゃたりないかな。

タオルとかももって行ってあげた方がいいよね？

夜露とかにぬれちゃうかなあ…

ダンボールをじっとみつめて、考え込む少女。

中にセーターを敷いて、古いタオルを何枚か敷いて。

「ちょっと見た目悪いかもだけど、これでどうだろ」

ぐると巻いたのは、ビニール袋。

透明なビニールテープでぐるっと固定して、入り口以外を密封して。

うん、これなら多分大丈夫かな？

草の上おいてもきつと濡れないよね。

これでいいかな。

母親が入れてくれたオレンジジュースを一息に飲み干して、上着を手に持つ少女。

玄関に向かい、ドアを開けると外へ出る。

あったかくしてかないとダメだよ。

外はほら、風がすごいからね。

せっかくあったまったピンク肌が冷えちゃうのは残念。

あ、でもボクとしてはジャージよりパジャマがいいな。

ボタンがあるのが好みなんだ。

理由はヒミツ。

うん、そうそう、パジャマ着て、くるくるマフラーにコートがいいよ。

もしかしたら、誰かにあうかもしれないし。

「ちっ」

朝練なんかあるわけないだろ。
いちいち突っ込んでくるなよ。

ただでさえ学校で委員会だの任されて時間がないってのに。

まあ、やっておいて損はないからいい。
信頼されるし、「イイヒト」でいられるし。

生徒会、文学部、学級委員、有志活動。
ある程度は名目だけでも問題ない。

文学部ってことで図書館は自由に使える。
いちいち運動部なんか入ってケガでもしたら困るだろうが。

石段を登り、草を蹴飛ばしながら歩く少年。

橋の手前、二本の大きな木の前で足を停めると、辺りを見回す。

車道から離れたそこに、人気は無い。

カチッ。

学校指定のカバンの奥の、小さな袋。

彼の母親が持たせてくれた小さなおにぎりの下から、煙草を取り出すと、火をつける。

「いちいち持たせるなって言ってるのに」

冷たく冷えたそれを、草むらに放り投げる。

そして、煙を吐き出すとツバを吐く。

カサッ。

物音にびくつと振り返る少年。

思わず手にしている煙草を背にかくし、あたりの様子を伺う。

「……?」

が、誰も居ない。

注意深く辺りを見回して、人影が無い事を確認して、もう一度、煙草を口元に持っていく。

ガサガサッ。

「…なんだよ、犬かよ」

丁度自分が放り投げたおにぎりの辺りに、白い毛が見えて、呟く。
安心した後、自分の慌てっぷりに不愉快なものを感じる。

「ちっ」

ツバを吐くと、足元の石を拾い、力を込めて犬が居る辺りを目指

して投げる…が、暗がりのせいかな、的が外れたようだ。
とはいえ、突然の攻撃に驚いたのか草むらからもう一つ、小さな
何か。

「…猫か」

桜井君、煙草すうんだー？

まあ、いいんじゃないの、ボクには関係ないしね。
ママが作ってくれたおにぎり、いつも食べてないの？
ならボクに一つ頂戴よ。

犬、嫌い？

桜井君、雰囲気ダークでメロメロスマイルがないよ？

でもきつと河合さんはメロメロ。

これが、「男のニヒルなカゲ」ってやつ？

ボクもやってみようかな。

ボクに近寄るとやけどするんだぜ。
ナイロンは良く燃えるから注意なんだぜ。

どうだ、クラクラきただろ？

煙を吐き出して、持ち手の指にほんのり熱を感じて、手元を見る。
既にフィルターの手前まで赤い光が迫ってきている。

「苦い」

帰って勉強しないと。

明日は確か役員の集まりと何があったつけ。

部活だのなんだの浮かれてるやつらの面倒見て。

修学旅行とか。

面倒なんだよ。

いちいち集まって集団行動なんて。

ツバを吐き、煙草を足元に投げ捨てると踏み消す。

「……」

少し離れた所で桜井が投げたおにぎりを食べている犬と猫。
それを、じっと見つめている桜井。

その視線に気づいてか、小さな猫が桜井の足元に擦り寄ってくる。

「毛がつくだろ、やめろって」

足を払うが、ゴロゴロ、と喉を鳴らして足元に擦り寄って来る猫。それを嫌そうに見て、しゃがみこむと。

「やめろって言ってんだろ」

カバンの中から、取り出したのはナイフ。

左手で猫をそっと押さえる。

撫でられているのか、とゴロゴロ喉を鳴らしながら頭を摺り寄せてくる。

その頭を、首筋を押さえて。

「……」

そっと尻尾にナイフを当てる。

するり、と尻尾がうねって、根元に当てたナイフは尻尾の先に。

「動くなって。やめろって言ってのに聞かないお前が悪い」

地面に押し付ける。

「これは、しつけど」

「…!？」

今の、何？

どうしたの？

あの、猫の声!？

抱えたダンボールをぐっと握りなおして、急いで石段を降りる、
河合。

そして川原を走る。

ウオオオォーン、と犬の声が夜の闇に響く。

不安が押し寄せてきて、只、ひたすらに冷たい川原を走る。

「猫ちゃん!？おじいちゃん!？」

走って、走って。

川原に一人の男の姿。

遠めに判別できず、一瞬びくつと身構える。

たじろいだ様子は男も同じ。
びゅううつ、と風が吹いて月明かり。

その男が、一歩、二歩。

「河合…さん？」

「…!!…桜井君…？」

ほら、ね？

ジャージじゃなくて良かったでしょ？

やっぱり、女の子は可愛くしてなくちゃ。

「誰か」にあうかもしれないって、言ったよね。

意外なところで意外なデアイ。

うん、ロマンティックってやつだよね？

なんだっけ。

最近良く聞くヤツ。

あ、そうそう、デアイケイ、だっけ。

あれでも良く書いてあるよね？

人と人が会おうから、デアイケイ。

わかりやすいよね。

あれって面白い？

デアイしたい人がたくさんいるの？

人、そこらにいっぱいいるのに、それとはちがう？

でもそんな面倒なコトしないでさ、

出会いたいですって看板もって歩いた方が早いと思うな、ボク。

うん、やっぱり冴えてる。

いいよ、このアイデア使っても。

「河合さん、もう夜遅いよ、どうしたの？」

「あ…」

「女の子が夜遅くに一人出歩いてたら、危ないよ？」

驚いて目を丸くする河合。

それに優しく笑って、桜井が言う。

「あの、私…」

「それ、なに？」

河合の抱えたダンボールを指差す桜井。

「あ、これ、ここに小さな猫が居て…」

「ああ、あったかそうだね。河合さんは優しいね」

そういつて、にっこりと笑う桜井。

こんなところで桜井君に会うなんて…。

頭もボサボサだし、もうちょっと整えてくればよかった。

…って、さっきの声は？

「あ、あの、桜井君、猫みてない？」

「猫？」

「さっき、すごい声して…」

ぐるり、と川原を見回す桜井。

「ああ、さっき大きな犬も居たね。ケンカでもしたのかな？」

「おじいちゃん犬で、昼間仲良くしてたの…」

心配そうに辺りを見回す河合の目に留まったのは、食べかけのおにぎり。

白い飯がてんと川原に散らばっている。

ふっとその目線に桜井が気づく。

「僕が悪い事しちゃったのかもしれないな」

「——え？」

「食べ物を、と思って投げてやったんだけど…」

そういつて目を伏せる。

「動物だと、食べ物争ってケンカはよくあることだからね、悪い事した」

「そんな…桜井君、優しいよ。おなかすかせたら、可愛そうだもん」

「ありがとう。河合さんは優しいね」

ぽっと頬を赤らめてうつむく河合。

それをみて顔に穏やかな笑みを浮かべる桜井。

「あ、桜井君は塾の帰り？」

「うん。ちょっと帰りに頼まれごとあってね」

「そうなんだ。いつも、ほんと大変なのに桜井君、凄い」

「そんなことないよ、人の役に立てるのは嬉しいことだから」

うつむいた河合の目線に、ふっと見えたのは。

――血？

ケンカして、…どんな酷いケガしたんだろう…。

あんなちっちゃいのに。

あんなに仲よさそうだったのに。

夜の闇にまぎれて、はっきりは見えない。

が、その赤黒く、地面にのこった染み。

少女がもうあと少し早くそれに気がついて、触れていたのなら温かさを感じたのかもしれない、それ。

気がついて、じっとそれを見る少女に、少年が言う。

「河合さんも、早めに帰ったほうがいいよ。犬に襲われたら大変だから」

「うん…でも、おじいちゃん犬だから――」

「それでも、襲ってきてケガでもしたら良くない。後で保健所に連絡しておかないと。」

「保健所…？」

「うん、他にもケガしたりする人いたら大変だし、遠吠えで騒音公害になるからね」

保健所…。

あんなおじいちゃん犬なのに――

そんなの、イヤ。

家に連れて行けたら…。

「桜井君…連絡、保健所にしないで…」

「え？」

「おじいちゃん犬だし、きっと…お願い」

家に、…きつと無理。

ずつと面倒みるなんて出来ないし、それに、親だって反対する。
だもん、きつと、仕方ないけど…。

放っておいても長くないだろうけどね。

まあ、逢ったのが河合でよかった。

まさか誰かに逢うとは思わなかったけど、コイツなら問題ない。

「そうだね、それじゃ僕はやめておこう」

「ありがとう」

「河合さんは優しいね。お風呂上り？髪が濡れてるみたいだけど？」

「――あ…ボサボサだから、あんまり見ないで」

黙って、じつと河合を見る桜井。

困ったようにうつむく、河合。

コイツなら、いけるよな。

信用してるし態度からして僕のことを好いているのは間違いない。
学校でも、誰かと話してる様子はないし。

「桜井：君？」

「河合さん、髪に」

そういつて、河合の髪に触れる桜井。

びくつとするその反応を楽しむように、それでも優しい表情を崩さず。

「ごめん、びっくりさせたね」

「え、う、ううんっ」

一度伏せた視線が再び絡む。

どうしようか。

夜も遅いしな、勉強もあるし。

それにここでどうこう出来る訳じゃないし、今は辞めとくか。

「それじゃ、送るから帰ろう」

「あ、う、うんっ！」

気づかれないうちに家に帰さないで。

問題はないと思うけど、念の為早いとこ帰ってもらおう方がいい。

ふうん、そうなんだ。

ここで、なにしようとしたのかなー？

いいよね、夜の風呂上りのドキドキとかさ。

ボクもしてみたいんだけどね。

にっこりわらって先手を取る、うん、これだね？

でも、ニヒルなカゲ、河合さんみれなくて残念だった？

「ギャップにドキドキしちゃうー」ってやつだとおもうのにな。

にっこり笑って、ちょっと黙って、ドッキドキ。

ボクもやるから見てて。

ほら、どう？

あ、みてないね？

ダメ、チャンスは一回。

それがギャップにクラクラ作戦なのさ。

バツチりきめてやるんだぜ。

うん、やっぱりボクかっこいい。

きよろきよろ、と、辺りを見回す少女。

手に持ったままのダンボールのおき場所を探しているのか。

「河合さん？」

「これ、どこにおこうかって思ってた…」

「そうだね、この木の下がいいかもしれない」

「うん」

素直に返事をする、木の下にそれをそっと置く。

あの声、ほんとに大丈夫かな…

探したほうがいいのか。

でも、…どこにいるんだろう――

「それじゃ、今日は帰ろうか」

「あ、…うん」

「河合さんの家、この近くなの？」

「あそここの階段上がってすぐなの」

指差すのは、少女が来た道。

土手を上がる石階段。

それをあがれば、団地があり、少女の家はその川沿いになる。

それをみて、頷く少年を見て、少女も、ただ、頷く。

気になる…けど…

桜井君がそういうんだし、大丈夫…だよな？

河合さん、犬と猫探してるの？

さっきの声。

きっと今日は出てこないよ。

動物はケガしたら、じつとうずくまって、治すんだって。

イタイ、って言わないで、じつとうずくまって治るの待ってる。

人間は、どう？

見た目で、優しくて、周りからも認められてたら。

「」の叫び声よりも、「そのひと」の声のほうが、大きいんだね。

警戒して、イタくて、出てこないのは、きっと本当。

人間は、どう？

ボク？

ボクだったら、もちろん、
だよ。
ねっ？

顔が、熱い。

まさか、こんなところで逢えるなんて。

「どうしたの？」

「あ、ううん。…なんだか、緊張しちゃって」

「僕もそうだよ。びっくりしたね」

川原から、家までの道がこんなに近いことが、少し残念。
この階段を登ったら、もう家に着いちゃう。

寒さから身を守るためか、恥じらいを隠すためか、少女は頬を手のひらで覆う。

ひんやりと冷たい手のひらが、熱い頬に触れて温かい。

それを、横目で見る少年。

薄く笑う、が、少女の目にはそれは見えていない。

その、少女の手をふっと掴む少年。

「！」

驚いて、歩いていた足取りが止まる。

「手、冷たいね」

「さ、桜井君…？」

驚いて、見つめたその少年は、穏やかに笑みを浮かべて。
少女の手を握ったまま、ゆっくりと下に下ろす。

「ん、ごめんね。手が冷たいのになって思って」

「う、ううんっ！」

「そっか、余計な事しちゃったね。ごめんね」

そういつて、手を放す。

あ…と、一瞬残念そうに、寂しそうに声が漏れる河合。
その様子を見て、くすつと笑う桜井。

「まだ、冷たいなら」

と、手を差し出す。

うわー、なんだか照れちゃったね、ボク。

桜井君ってば、かっこいいー！

それで？それで？

河合さんってば、どうしちゃうの？

頭の中、きつとドキドキ桜井でいっぱいだね。

桜井君ってば、河合キラー！
ねらい目は冷え性って感じ？

いいね、冬の夜のドキドキ。

あの、犬と猫は、どうしてるかな。

手、繋いで…っつ。

石段の前で立ち止まって、じっと無言の二人。
ほんの、あと数段あがればそこは少女の家。

「！」

パッと灯された明かりに驚いて顔を上げる。

少女の家の、風呂場の明かりだろう。

母親が風呂に入る時間なのだとふと思い出して、緊張感が溶けるのを感じる。

「河合さん家？」

「うん。親、お風呂みたい」

それを感じたのは、少年も同じなのだろうか、とふと少女は思う。
急に先ほどまでのあの空気が流れたような、それでいてもまだ、
どこか特別なような。

「そっか、それじゃ、ここで帰るよ」

くすつと、笑って桜井が手を振る。

うん、と素直に頷いて、笑顔で手を振る桜井。

「うん、ありがと。気をつけてね」

石段を登る河合を見送ると、土手を上がり、明るい街灯の下を帰っていく桜井。

既に夜も遅くなり、人気は殆どといっていいほどない。

自宅の玄関の前でその姿をしばらく見送り、少年が土手を越え、その姿が見えなくなるのを見届けて、少女はドアを開け、家の中に入る。

「ただいま」

風呂場に声を掛けると、母親がおかえり、と声を掛けてくれる。

犬と、猫、飼いたいっていったら、どうかな？

やっぱ、ダメっていうだろな。

でも、もしいいよって言ってくれたら？

…でも、私面倒みきれないかもしれない。

でも、どうしたらいいんだろう。

桜井君、保健所に言わないでくれるって言ってたし、まだ、大丈夫

夫だよな？

ふうん、そっかそっか。

河合さん、ママが「ダメ」っていうの、ちょこっと期待してる？

なんとかしてはあげたいけど、うん、そうだよな。

ずっと一生、っていうのって結構面倒だったり？

うん、しょうがないよね。

途中で面倒見切れなくなって投げ出すのは良くないよね。

だったら。

「ママがダメっていうから」

「ほんとに飼いたかったんだけど」

うん、ニンゲンだしね、仕方ないんじゃない？

手が冷たい。

——それにしても、家近かったのか。

これからは場所気をつけないといけないな。

「また、そのうちに」

近いうちに。

悪くないよな、うるさいタイプじゃなさそうだし。

どうせ、高校入れば学校変わるんだし、後腐れもないもんな。

いちいち人に言うタイプじゃなさそうだし、第一言う人もいなそうだし。

ふうっと溜息を吐くと、自分の家の門を音を立てないように開けて、中へ。

夜も遅く、しびれるような冷たさを指先に感じて、ぐっと拳を握り、軽く暖めると靴を脱ぎ、部屋へと戻る。

「あら、おかえりなさい。遅かったのね？」

「ああ、少し残って質問してきたんだ」

「そう、おなかはずいてない？」

「大丈夫。風呂入ってもうちちょっと勉強したら寝るから」

「無理しないでね？お夜食もっていく？」

心配そうに声を掛けてくる母親に、笑顔で応える少年。

「ううん、母さんも早く休んで。少ししたら僕も休むから」

その笑顔にほっとしたように、同じように笑顔をかわすと頷いて
自室に戻る母親。

それを見届けて、少年は冷えた体を温めるべく、風呂場へ向かう。

いいなー、ママすっごい優しそう。

おにぎりつくってくれたり、うらやましい。

ビジんなママで、優しくて。

おうちはキレイであつたかくて。

あ、桜井君これからお風呂？

オトコノコのお風呂、別に見ても楽しくないんだけどな。
でもせっかくだからみーちゃおつ。

入浴剤で真っ白だってオツケーさ。
むしろそのほうがオツケーなのはヒミツ。

あ、キミはどう？

お風呂は入浴剤いれるタイプ？

「・・・っ！」

じんわり、と口元から滲む血。

最近生え始めた口元のヒゲを風呂場で剃るのが日課なのだが、少し手元が狂ったのか。

その血を湯で洗い流し、頭からシャワーを浴びると、湯船に浸かる少年。

明日、学校に行ったら。

予習と復習はこれからすればいい。

放課後にならないうちに役員日誌書いて、先生に渡して。

明日の塾は少し早く行けるかな。

帰りに、又あの川原に行ってもいい。

河合があのだ猫知ってたって言うのはちょっと問題だったな。

まあ、まだどうこうっていうわけじゃないし、また探せばいい。

まずは、河合かな。

色々試してみるのも悪くない。

勉強ばかりで女知らないとか言われるのも不愉快だ。

塾に来てるヤツラでさえ、暇さえありゃ女・女・女……うるさいんだよ。

お前らに劣ってるつもりなんかないい。

その気になれば何だってできるんだ。

あー、ボクって残念な気持ちでいっぱい。

桜井君は入浴剤いれないんだね。

っていつてもさ、体洗う時もタオルかけるの？

まあボクには救いだけどさ？

でも、タオル越しに見えるのもちょっとセツナイね。

先に桜井君お風呂入っててくれたら河合さんで口直しできたのにな。

あ、でも桜井君って、体毛意外と薄いんだ。

その辺もモテポイント？

腕とかツルツルだし、おへそも。

あ、これ以上はボクいいや。

密林ジャングルが頭に焼き付いたら眠れなくなっちゃう。

キンコンカーンコン

吐く息も白い冬の朝に響く、始業5分前の鐘。

生徒達が慌しく席に着き、教師が来るのを待っている。

いつもこの時間はざわざわと騒がしく、笑い声や挨拶が教室中に響き渡る。

席についているものは少なく、大抵が友人と笑い声をあげ、数名が忘れた宿題を慌てて仕上げ。

なんてことはない極ありふれた日常の始まりだ。

「桜井君、問題13って、答えA-13であってる？」

「いや、僕はA-15だったかな」

「え、ほんと？じゃあ直しておくね！ありがとー！」

後方の席で交わされる会話を漏れ聞いてほっと一息つく少女、河合。

——よかった、合ってる。

今日はここあてられても大丈夫。

昨日の夜、教科書を調べながら出来た答えは、A-15。
彼の答えと同じなら、一安心だ。

「そういえばさ、昨日夜桜井君コンビニいなかった？」

「え？」

「11時過ぎだったかな、うちあの近くの。塾の帰り？」

「あ、そうそう。昨日はちょっと遅くなってね」

「そうだったんだー」

昨日の夜、という言葉にドキっとして、一瞬肩を震わせる河合。
あのあと、コンビニよって帰ったんだ、とふと思って。

桜井君、そんなに帰り遅かったんだ。

なのに、宿題も完璧だし、ほんと凄いやね。見習わなくちゃ。

繋いだ手を思い出し、ふっと顔が赤くなるのを感じて両手で頬を覆う。

「てか昨日、河合も見かけたんだよね」

背後で交わされる会話なので、桜井の表情は窺い知れない。

ドキドキと、自分の鼓動が早くなるのを感じる。

……が、どうするわけにもいかず。

只、教科書を出して、筆箱を開け、予習の準備をなるべくゆつくり、時間を掛けて行う。

「車だったからあれ？って思ったんだけどさ、陸橋渡った時あの

川原で見かけてさ」

「車だった？」

「うん、親が妹迎えにいくの付き合ってたの」

「そうなんだ」

「丁度家帰って、その後でコンビニで見かけてさ」

なにになに？という感じで何人かが会話に加わるのが漏れ聞こえてくる。

どうしよう、どうしよう、どうしよう。

先生早く来て…無駄話は止めろって…

桜井君、困る。

きつと、困ってる。

ほんとに、ほんとに偶然なのに…っ

「え、なに、昨日河合と桜井君一緒にいたの？」

「ちらつと来るまで通り過ぎただけだったけど、一緒にいるの見たよー」

「なんでなんで？」

振り向きたい、が振り向けない。

どんな様子になっているのか、少しでも知りたくて少女はひたすら息を殺し。

一度出したシャープペンシルをもう一度芯を入れなおし、聞こえていないフリを装う。

そして教科書を開き、必死で予習をしているフリをし、背後の会話に意識を集中する。

「たまたま、塾の帰り道にあの近くに頼まれごとがあったんだよ」
「河合んところ？」

「いや、塾の友達でね。丁度通りがかった時に偶然あったんだ」
「マジ？ 桜井君見かけて、河合がでてきたんじゃないの？」
「ありえるー！ やーらしー！」

不意に出た自分の名前に、思わず反応して顔が僅かに動く。
それを、必死で気づかれないようにと、わざとノートをめくり、
目に付いた単語を書き綴る。

— for the purpose of : 〳の目的の為に
— retribution : 因果応報
— pretend : 〳のフリをする・みせかける・言い張
る・要求する

「違うよ、只本当に偶然だったんだ」
「えー、ほんとー？ どうなのよー、か・わ・い・さーん？」
「ぜってえ狙ってるよねー、図々しいっつーのっ！」
「変な病気もってそうだしー？ 桜井君騙されちゃだめだからねー
？」

—— alert：油断のない・機敏な・警戒

—— coincidence：同時発生・偶然の一致

「本当にたまたまだって」

「もうすぐ修学旅行だし、一緒に行動してーとかいわれたらどうするー？」

この学校では、真冬のスキー合宿が修学旅行となっている。

観光地が地元であり、であるからこそ、そこをめぐるのではなく真冬に雪山で親睦を深め、スポーツを通して心身共に健全にという名目なのである。

が、3泊4日ものスキー合宿とはいえ、日程後半にはほぼ半数以上の生徒が筋肉痛で苦しみ、部屋にこもる。

仲の良い友人同士で一日中会話に熱中したり、ここぞとばかりにカップルが出来上がったたりするので、なんだかんだいいながらも生徒の楽しみなのである。

「冗談でしょー?! てか河合と誰が同じ班になるわけ？」

「うちパス！」

「あたしもやだって! キモイし、あんなの居たら旅行台無し!」

「そんなこといわないでさ」

背中越しの会話、であるが故に声は聞こえても表情まではわからない。

最後の、とりなしのような桜井の声。

どんな表情で言っているのだろうか。

— collaborate …共同して働く・共同研究する
— sin …道徳上の罪
—

「ねー、河合ー」

はつきりと、呼びかけてくる声。

会話に自分の名前が出ているのを聞きながら、気づかれないようにと綴っていた単語。

ぴた、とノートに書き込んでいたシャープペンシルが止まり。

少女は返事を躊躇い、息を呑む。

「ちょっと、シカトしてんなっつーの」

「……はい…」

「あんたさー。修学旅行誰と組むわけ？」

「てかさ？昨日桜井君見つけてでていったんでしょー？」

「……ほんとに、偶然で…。班は……」

班、組む人なんて、いないもん…

向き直って、返事はしたものうつむいたその視界に桜井の顔は映らない。

ただ、落書きが目立つ木製の机。

そして、クラスメートの足と、指先。

「班は、なに？誰と組むのってきいてんの」

「……私……」

「いいじゃないか、ほら、授業始まるから」

桜井がかける声に、ほっとする河合。

そうだ、もうすぐ授業が始まるんだ。

そうしたら、この話から逃げられる。

——キーンコーンカーンコーン

一分の狂いもなく、毎日の始業を告げる、鐘の音。

「ほら、チャイムなったぞ」

「あーあ、またねっ」

鳴り始まると同時に自分の席へと向かうクラスメート達。
ほっとして、再び自分の机に向き直る河合。

よかった…

でも、次の休み時間はどうしよう…

誰と班組むかなんて、決まっていな…

桜井君と昨日会ったのだって、本当に偶然なのに——

気づかれないように、押し殺して溜息をつく少女。

とりあえずは逃げられた。

とはいえ、授業が終われば、また休み時間になる。

それを思っ、憂鬱な気分になる。

同時に、憧れの少年が庇ってくれた事を思い、ほんの少し気分が良くなる。

昨夜の出来事を思い出して、再び鼓動が早くなる。

偶然だけど……

「まだ、冷たいなら」

そう言って差し出された手を思い出す。

冷たい乾いた夜の空気の中、それがわずかに湿って温かく。

交わした会話は短かったとしても、あの時間のあの気持ちは特別
なはずだ。

「…つか、先生おそくね？」

「誰かみてこいってー」

先生、遅いけど、どうしたんだろう。

少しずつクラス中が騒ぎ出すのを聞いて、不安が押し寄せてくる。
既に隣の席同士でなにやら話し始まっているクラスメートの声。

「”誰か”みてこいってー」

「もしかして自習？」

「マジどうしたんだろー？」

「だから、ほら、”だーれーかー”見てこいって」

”誰か”

”だーれーかー”

徐々に声が大きくなって、少女はぐっと唇を噛む。

「早くいってこいっつーの、”誰か”」

「気づいてないんじゃない？ ”誰か” はニブいんだし」

誰か。

…きつと、私じゃ、ないよね？

私じゃ、ないよ…ね？

「いいよ、それじゃ僕が見てくるから」

ずっと、涼しげな声。

それが少年桜井のものだと瞬時にわかる。

「なんでー？ 桜井君いっちゃつまんないんだけどー！」

「つか、”誰か” シカトしてんなっつーの」

「いいよ、僕が行って来る」

「えー、なんで桜井君がー！ 河合庇ってるのー？」

「マジー！？」

会話の矛先が、僅かに少年に向くのを感じる。

一瞬、何かを期待して、僅かに安心したような、妙な気持ちにな
って少女は息を呑む。

その気持ちは、なんなのだろう。

当事者から、第三者に、ほんの一步動いたかのような。

経験したことは無い、が。

暗闇で銃で狙われていたのが、風でそれて、逃げられた獣のような。

多分、しっくり当てはまる事はない。

うまく言い表すには、何が足りないのだろう。

逆に、何かが余っているのだろうか。

なんともいえない気持ちで黙りこくる河合の耳に。
桜井に。

クラスに。

一人の言葉が響く。

「もしかして、桜井君、河合ラブ？」

あーらら、こららっ？

クラスメートの女の子、やきもちやいてるってやつ？

うんうん、おもしろくないよねー。

自分が好きなコが他のコかばうなんてさー？

だもん、文句の一つもいいなくなるってやつ？

手に入らないんだったら、壊しちゃえ？

思い通りにならないと、ムツカムカ？

ベイビー達ったら、過激なんだね。

でも、それも恋の炎に身を焦がすってやつ？

そして。

河合さん、どうするの？

桜井君、どうするの？

「えー、マジで？」

「桜井君、そうなのー？」

「それ、すっげガツカリなんだけどー」

——どうしよう、どうしよう。

桜井君…

「つか、なんで河合なわけー？」

——桜井君……っ

「河合が彼氏もちー？ありえないんだけど」
「ねー、桜井君ー？」

ふざけるなよ。

誰がワザワザあんな女を。

庇った方がいいのか？

「なにいつてんだ、そんな事あるわけないだろ」って。

「学級委員」として、「生徒会役員」として、そのほうが無難か？
それとも、このメス共に加担したほうが「クラスメート」として
立場はいいのか？

朝からイライラさせるなよ。

なんであんな河合ごときの為にこんな面倒おしつけられないとい
けないんだ。

割に合わない。

とりあえず、庇うより加担したほうが良いよな。
好き好んで矢面に立つメリットもない。

「そんなわけないだろ、河合さんだぞ？」

ふっと軽く笑って、少年がつむぎだした言葉。

「あ、やっぱりー？だとおもったんだあ」

「ありえないじゃん、つりあわなすぎっ！」
「なに、河合？期待しちゃってるんじゃない？」
「うっわキモ！」

再び、元に戻った空気。

ざわざわと、笑い声が響く教室。

「つーか、桜井君冗談うますぎ！一瞬マジでびっくりしたって！」
「だろ？タメが大事だ、試験にでるから覚えておくように」
「あっは！ほんとウケる！桜井君さいっこー！」
「ほんっと！超笑ったー！」

笑いが溢れる教室。

一見、その言葉はとても穏やかで、明るい。

あーあ、河合さん、ドンマイ。

桜井君、いつもそんな考えてたらアタマ痛くならない？

ま、でもそこがニヒルでかっこいいのかも？

でもさー。

あのまま黙ってたなら、桜井君、やきもちガールズから何言われたかな。

やきもちやいたり、あれこれ考えたり、ムツカムカ。
ほーんとニンゲン大変だねえ？

皆の憧れモテモテ桜井君。

わざわざ河合さん庇って、立場悪くしてる場合じゃないよね。

皆に色々いわれる河合さん。

いつも黙って俯いて。

逃げたいって思っても、どうするの？

あ、そうだ。

「スケープゴート」って、知ってる？

意味はよくわからないけど、こないだ見た本に書いてあったんだ。
次々、「スケープゴート」って作って、結局順番ってハナシだった。

なら最初からしなけりゃいいのにね。

ニンゲンも、きっと暇なんだね。

そんな言葉があるくらいだから、有名なのかな？
ボクはそれよりスケートボードの方がスキさ。

技だってきめちゃうんだぜ。

…：そっか、そうだよね。

桜井君が、…：そんなことあるわけないじゃん。
でも、でも。

桜井君、もしかしたら、庇ってくれるかもなんて…

そんなことある訳ないのにね。

昨日の、アレは、ほんとに偶然で。

優しかったのに…

でも、もう、こんなの、やだ。

もしかしたら、もしかしたら…

俯いて、ぐっと握った拳がわずかに震える。

何かしなくては。

言わなくては。

少女の頭の中に巡る言葉。

「…って…」

一言、呟く。

余りにも小さく、その声は誰にも聞き届けられず。

「…だって…っ」

もう一度、吐き出すように。

「はぁ？」

その声に、桜井と話し込んでいたクラスメートが聞き返す。

大きく吸い込んだ息を、吐こうとして、ほんのすこし漏れた吐息と共に「何か」が抜けていくのを感じて、ぐっところえて。

ガタッ。

少女河合は立ち上がる。

「あ、先生みにいくのー？早く行ってくれるー？」

「とっとといってこいっつーの、もったいつけてねーでさー？」

「河合さん、先生呼びにいくのなら速やかにね？」

「あた…しっ！」

貯めた吐息とともに発した言葉は、思いのほか大きく。

一瞬、静かになる教室の空気がピリピリと、全身に突き刺さっていくような感覚を味わう。

——どうしようどうしようどうしよう

先生呼びに…？

どうしようどうしようどうしよう……

それじゃ、それじゃ変わらない
今なら、きつと今なら

きつと今なら…っ

「桜井君に呼ばれて…話があるからって…」
「はあ？」

「クラスの女は…っ…うるさくてイヤだからって」

「ウソついてんじゃねーっつの河合！」
「あるわけないじゃん、バカじゃないの？？」

口々に反論の声を上げるクラスメート。
視線を交わす事無く、一度に吸い込んだ呼吸のまま、言葉を続ける河合。

「ウソじゃない…！だから、夜にあたしんちに…！」

「…河合さん、どうしたの」
「ほら、桜井君呆れてるじゃん、いい加減にしたらあ？」

今までにない桜井の冷たい目線が、乾いた笑いが河合に向けられる。

彼の声に思わず顔をあげ、その表紙に絡んだ目線がに思わず少女はたじろいでしまう。

やっぱり、やっぱりダメ…？

でも、でもっ…

此処まできたら…こんなこといっちゃったら…

もう、なんとかしなくちゃ…ウソでも、ウソでもいいからっ！

「あー、ちょーむかつくんだけど？」

「マジ頭いっちゃったんじゃないのー？」

呆れたように言うクラスメートは、視界に入っていないのか。
その、声は耳に届いていないのか。

届いていて、それでもなお、止められないのか。

堰を切ったように、少女、河合は下を向いたまま言葉を続ける。

「学校じゃ話せないから…っ…帰りにコンビニ寄るから…っ」

「河合さん、先生呼びにいつてくれるかな」

「とっとなんてこっつーの！ウザいんだよ河合！」

「桜井君、迷惑してんじゃない！相手欲しいなら出会い系でもいいけ
ばあ？」

「会ったら即バレだろーけどー？」

「ほんとほんと、マジウケるっ！」

スキだったオトコノコとヒミツの夜。

つつい手なんか繋いで雰囲気ばっちり。

うんうん、期待しちゃうよね？

期待して、急に親密なカンジ。

期待して、その分の反動っておっきいねー？

やっぱり、河合さんも

「手に入らないんだったら、壊しちゃえ？」

「思い通りにならないと、ムッカムカ？」

純情乙女を期待させて、裏切った罪は重いつてやつ？

それとも、桜井君がいじわるされちゃっても、助けて欲しかった？

うーん、ボクには難しいな。

こないだ読んだ本でさ、

「アナタの為ならアタシどうなってもいいの」
とか、

「お願い、一緒に死んで頂戴！」

とか見たけど、どう？

あ、ボクの読書傾向じゃないからね？

やっぱりボクはムチムチボインなのが出てきて、ヒーローがでてこなくっちゃ。

ムチムチボインちゃんがアミアミで、たまらないよね。
でも、ボクはムチはちよつとイヤかも。

うーん、オトナって難しいねっ？

「あた：しっ：」

ぐっと拳を握って、立ちすくむ少女。

それを取り囲むように、数名。

自分の席についたまま、成り行きを笑って眺める者数名。
まったく興味なさそうに噂話続ける者も、数名。

「いい加減黙ればー？ほんとムカツクんだけど」

「キモ河合、マジウザ」

「河合さん、保健室行ってきたら。僕が先生呼びに行くから君は休んでくるといい」

「やっぱ桜井君やさしー？」

にっ、と優しく、極上の笑顔で笑う桜井。

冷やかしのなか、からかいなのか。いづれかの声を掛けてくるク

ラスメートを手を上げて制すると。

「アタマの具合みてもらうといいよ」

ぽん、と河合の肩を叩いてそう言う。

「あははははは！ほんっとそうだわ！」

「妄想おっつかれー！」

途端、笑い声が巻き起こる。

——…

…な…に…いったんだろう…
なに、私…

かーっと、視界が白く。

こめかみが熱くなるのを感じる。

何を考えて、あんなことを言ったのか。

一体何を期待して。

憧れていた少年と、その秘め事に盛り上がった気持ち。

私…

ふと、急速に体から力が抜けて行くのを感じ、我に返る。

私…どうしたら…

何で、あんなこと…でも…

どうしよう…

「私…」

「カーワイ・キーモーイ！カーワイ・ウーザーイ！」

一言、発した言葉を消し去るように、クラスの中に響く声。

「カーワイ・キーモーイ！カーワイ・ウーザーイ！」

何か言おう、と口を開くも。

「カーワイ・キーモーイ！カーワイ・ウーザーイ！」

輪唱の様に続けられるそれに言葉を失い、再びうつむく河合。
ある程度の間隔を保ってくりかえされるそれを止めたのは。

「皆、ストップ」

涼やかな、落ち着いた、桜井の声。

「!？」

驚いて、ぴたっと黙るクラスメート。
そして、僅かな期待と、驚きを込めて桜井を見上げる河合。
集団に見つめられて、口を開く桜井。

うっひゃー、桜井君、かーっこいー!

ヒーローってやつだね?

落として、あげる、これ最高。

うんうん、効果絶大。

なんていうんだっけ、えーっと。

「桜井の一声でしーんとなりました」

なんだっけ?

サル的一声?

犬の遠吠え?

惜しい気がするんだけど、どう?

「他のクラスに聞こえちゃうだろう？ イジメと勘違いされたら怒られる」

そういつて、にっこり、と笑う。

「あ、ほんとー！ イジメなんかじゃないのにねー」

「そんなんでウチら怒られたら超被害なんだけど」

「ほんと居るだけで迷惑、しゃべればウザイ、見るとキモイ、三拍子揃ったってカンジ？」

口々にそう言つて、じつと河合を見るクラスメート。

その視線に射すくめられたかのように立ち尽くしたまま動けない河合。

ほんのわずかに動かした視界に入る桜井は、穏やかに席に座り、笑みを浮かべている。

「つーか、なんで生まれてきたのー？」

「桜井くーん、はーい、しっつもーん！」

「ん？」

「人間一人いることで、どの位資源が無駄になるんでしょうかっ？」

先生に質問する時のように手を上げて、問いかけるクラスメートの一人に。

「まず、酸素を吸って、二酸化炭素を吐き出して。生きていくためには水が欠かせないね。そして、他の生き物を殺してそれを恒常的に摂取することで人体の生命活動が行われる。つまり、生きていくためには他を殺してその上に生きていくっていうことだね」

変わらない笑顔で応える桜井。

さっすが！と彼の博学を褒め称える声があちこちであがり、問いかけてきたクラスメートが河合に向き直ると。

「だってさー、てことはコイツ生きてるだけで他が殺されてるって訳」

「うっわー、ひっでえ。どうせ河合なんだし、死んじゃえぼ？」

「ほんとほんと。これからもずっと生きてるだけで資源の無駄！」

「…っ」

思わず、涙が滲む。

ずっと立ち尽くしている足に、じりじりと痛みを感じる。

口を開いても、出ない言葉の代わりに漏れるのはしゃくりあげる吐息の音。

「あた…し…」

「キモ！酸素すうなっつーの！」

「その分ウチらのが減るんだって、聞いてなかったの？」

「口塞いでそのまましんじゃえぼあ？」

ぽたっ、とこらえきれない涙が床に落ちる。

ぶるぶる、と肩を震わせて、顔を覆いひっくひっくとしゃくりあ

げる河合を見て。

「きったねー！河合の体液きたよ！」

「サイッテ、マジ消えてくれない？」

——ガラッ！

「お前らうるさいぞ！なにやってるんだ！」

突然、ドアを開けて入ってきたのは、担任。
重そうな箱を幾つも抱えて、ドアを開けるために一度下に置いたのか、すぐ後にも荷物が重ねられている。

「週番、荷物があるから取りに来るようになってただろう、なにやってたんだ！」

「えー？」

「…あ、わすれてたー！」

きゃあきゃあ笑いながら返事をする声と、仕方ないな、と呟く担任の声。

「……っ」

何かを言いかけて、言葉は出ない。

反射的に走り出す河合。

クラスメートの中を抜け、教室の後の出口を目指す。

「待て、河合！授業中だぞ！」

「河合、サボリー？ダメじゃーん」

「うっわー、堂々サボリ!？」

背後から聞こえてくる声と、ひやかすような、避難の声。
しかし、追いかけてくる足音は無く。

パタパタパタ、と冷たい廊下をひたすら、少女は走る。

週番って、なに？

長いスカートはいてカミソリ持ってるってやつ？

こわいねー、ボクだったら逃げちゃう。

河合さんも、怖いから逃げちゃう？

せっかく今日の予習してあるのに、残念だね。

どこいくの？
家？

あ、そっか。

河合さん家も昼間は誰も居ないもんね。

でも、荷物置いてきちゃって、良かったの？
靴も、上履きのままだよ？

——もう、イヤ……
どうしよう、学校さぼっちゃった……
だって。

……だって。

居たくない、居られないよ…
桜井君に、あんなこと、言っちゃった。
桜井君、怒ったよね。
なんてことしたんだろう。

「そんなわけないだろ、河合さんだぞ？」

…って、桜井君、言った。

「アタマの具合みてもらうといいよ」

っていつて、肩、ぽんって。
昨日繋いだては温かくて。
今日の桜井君の手は…

「カーワイイ・キーモーイ！カーワイイ・ウーザーイ！」

ウザイって、…キモイって…

言われた言葉が、頭にぐるぐるとイヤになるほど回る。
ぐっと目をつぶって、耳を塞ぐ。

それでも、延々と繰り返される頭の中のその言葉。

「……つく。…」

しゃくりあげて、滲んだ涙が閉じた瞼から制服に直に吸い込まれていく。

じわっと温かく、それが風に気化していくかのように、冷たくなっていく。

少女が座り込んでいるのは、彼女の学校から少し離れた公園のベンチ。

あてもなく走り続け。

かといって、上履きのままの自分。

荷物も持ってきていない。

家に帰るにも、近所の人に見られでもしたら、親に心配をかけることになったら。

どこに行く訳にも行かず、人気の少ない此処の公園に来たのだ。

——制服のままだし、もし、誰かに見られたらどうしよう。

……学校で、いじめられて、逃げて。

そんなこと、絶対言いたくない。

「明日、どうしよう…」

呟く。

行きたくない。

誰にも、会いたくない。

「まだ午前中だし…」

散々涙を零したせい、目がひりひりと痛い。

ふう、と溜息をついて空を見上げる。

どんよりとした冬の曇り空。

冷たい風がひゅううと吹いていて、せめて、コートをもってくればよかったと思う。

汚れて黒ずんだ上履きと、カサカサになった膝小僧。

少しずつ落ち着いてくると同時に、寒さがじわじわと体を侵して行く。

「一回、うちに帰ろう」

そうだ、そうしよう。

親は仕事で今は居ない。

万が一学校から電話が来てたりしたら困るよね…。

木枯らしぴーぽーふいているー、って歌、あったよね？

北風だっけ？ぴーぽー？

まあ、ボク的にはそんなニュアンス。

少女が一人、公園のベンチ。

まさにそんなカンジだよねっ。

でも、ここ寒いし、おうち帰るのがいいと思うよ。
あったかいおこたでココアとか、ボクスキだな。

あ、マシユマロいれると高級感でセレブってカンジ。
いちごマシユマロがいいんだけど、ココアに、どう？

乾燥したベンチの木材がわずかにささくれ立っていて、なんとなく
くいじっていた指先に刺さる。

冷え切った、冷たい指先がわずかにチリチリと痛む。

滲んだ血をまた指先で拭うと、重い腰をあげ、ベンチから立ち上
がる少女。

わずかに学校の鐘の音が聞こえて、ぐっと唇を噛む。

これから、家に戻って。

電話がきて、親に知られたら、困る。

もしかしたら、もう来てるかも知れないし、夜に来るかもしれな
い。

それなら、早めに帰って、お風呂もすませて、ずっと電話の近く
に居ればいい。

そう、思っ

うん、と頷くが、前に進まない体。

乾いた唇が風にさらされてヒリヒリと痛む。

めくれた皮を指先で剥いて、じりつと血が滲む。

無言で制服からリップクリームを取り出し、がさついた唇に塗り

つける。

スースーとした清涼感が風に、一層冷たい。

んー、女の子の唇はやわやわがいいよー？
ほら、ちゅーするとき、ドッキドキ。

あ、でも、静電気でパチツとかなったらどう？
暗いところでキラキラ？

君の唇に火花がボンバーだぜ。
ボクのハートに爆弾ドカーンな予感なんだぜ。

…悪くないね。
うん、悪くない。

そっか、河合さんもテクニシヤンだったんだね、やるなー。
ますますボクドキドキしちゃう。
やるね、河合さんってばボクキラー？
たまらないね、電撃キッス。

「猫ちゃん？」

いつもの川原で足を止める少女。

昨夜置いたダンボールの箱の中に、じっとしゃがみこんだまま、顔を上げる。

一緒にいた犬の姿は、ない。

「おじいちゃんは、どうしたの？」

辺りを見回してみる、が姿がない。

保健所に――、という言葉思い出し、同時に少年との昨夜の様子を思い出す、が今朝の出来事が頭に浮かび、また、唇を噛む。

ミィ、とあくびのついでに声がでた猫の頭を撫でてやろうとして。

「タバコ？」

吸殻に気がつく。

万が一、火事になったら大変。

それに、タバコ、食べたら毒だって聞いた事ある。

こんなところに捨てなくてもいいのに。

拾い上げて、ティッシュにくるんでポケットにしまうと、猫の頭

を撫でる。

ふわふわと、柔らかくて指先がほんのりと温くなる。

気持ちよさそうに目を細めて頭を摺り寄せてくるのが嬉しくて、思わず笑みを零す。

その、すらりと長かった尻尾。

「……！」

その先が、毛が剃られたようになって、赤く腫れ上がって……

「これ……っ!？」

腫れ上がったのではなく、「肉」なのだと、気がつく。

半透明な液体がにじみ出て。

昨日まであった部分はなく、傷のせいだろう、その先は異様に膨らんでいる。

「猫ちゃん、大丈夫っ!?!? 痛くないっ!?!？」

思わず、指先で触れようとするが、触っていいものか躊躇う。

近くに触れた刺激を嫌がってか、尻尾を引っ込める猫。

敷き詰めたタオルやセーターにわずかに血が付着しているのを見つけて、言葉に詰まる。

「痛くない、わけ…ないよ…ね…」

呟くが、猫は撫でられるのが心地よいのか、ごろごろ、と喉を鳴らしている。

他にも誰かがエサをあげているのか、すぐ近くに陶器の器が置い

てあり、中にはエサが入っているのをみて、ほんの少しほっとして。

誰かに、やられたんだろう…

でも、エサくれる人も、いるんだよね…？

どんな人が、こんなちっちゃいこの尻尾切るなんて…っ

ぐっ、と閉じた口の奥で、奥歯をかみ締める。

こんな、小さい子に、と腹ただしく。

許せない、と腹が立つが、どうしたらいいのか。

家に連れて帰る、と頭に浮かぶが、そこで考えが止まる。

ずっと、面倒を見ていく自信がない。

ただ、気まぐれのようにエサを与えて、撫でて、可愛がって。

そこで何か起きたらこうして苛立つしかできない。

もし、もっと酷いことが起きたとしても、どうしてやることも、できない。

無責任に、戯れに、気が向いたときに可愛がる。

まさに、そうなのだと思う。

責任がない、だから、何かがあっても、自分は責められることもないし、責める事も、できない。

しかし、責任を負うことが、余りにも重く感じられて。

「……ごめん…ね…」

呟いて、小さなその猫の頭を撫でて。

尻尾、切られちゃうなんて。

人間だったら、どういう気持ちなんだろう。
私に、尻尾はないけど、どれだけ、辛いんだろう。

……同じ目にあえば、いいのに。

そんなこととして、平気で今もいるのかもしれないなんて思ったら、許せない。

同じ目に、同じ気持ち味わえば、いいのに……。

うん、河合さんに尻尾はないよね。

ネコミミと、尻尾、可愛くてボク大スキ。

よく、ニンゲンでもつけてる人いるけど、ちょっといいよね？

ニンゲンに、尻尾は、ない。

猫の尻尾と同じのって、ニンゲンだと、なんだろうね。

ボク、ふかふか大スキだから、そんな意地悪はキライ。

イタイのも、イヤなんだけどな。

ねえ、河合さん。

そんなことしたのが、桜井君だってしったら、どうする？

桜井君も、尻尾はないよね。

ねえ、どうする？

「あ、おじいちゃん！」

わずかに足を引きずりながらこちらへ向かってくる、犬。

乱れた毛皮のあちこちに、土が付いていて、それをぶるぶると体を震わせてはらう。

撫でてやると、ゴツゴツという、感触。

「ん…？」

みると、それは、乾いたご飯粒。

それが、長い毛に絡まってこびりついている。

「ちよつと、とるね。痛かったら、ごめんね」

そういつて、それを押さえてぐっと引っ張る。

特に痛みはなかったらしく、首をかしげて、わずかに尻尾を振りながらその手を舐めてくる犬。

クンクン、と鳴らす鼻先に猫が体を伸ばして鼻を近づける。

すりすり、と顔をすり寄せ合うと、再び箱の中に座り込む猫。

「…：足、ケガしてるの？」

引きずっていた足を見る。

外からは、目だった傷はないが、中まではわからない。

どうして、と唇を噛むが、やはり、どうしていいかわからない。
箱の側の皿からエサを食べると、そこに座り込む犬の背を撫でて。

「……ひどい、ね…」

呟いて。

「酷い人、イヤだよね…ごめん、私も、何もしてあげられなくて…」

隣に座り込むと、じっと川を見つめる。

穏やかな、天気の良い一日。

なのに、気持ちは暗く、冷たく。

これから、どうしたらいいのだろうか、と思う。

「私、これから、どうしようかなあ…」

犬の背を撫でながら、呟く。

猫の小さな寝息が聞こえ始めて、ふっと肩の力を抜く。

「明日も、学校行かなくちゃいけないんだけど、行きたくないの…」

くうん、と犬が鼻を鳴らす。

その鼻先をとんとんと撫でて。

「おっきなケガしたり、事故とかあったら、学校、いけないよね…行きたくても、行けないなら、仕方ないよね…」

うん。

行きたくないんじゃないの。

行きたいんだけど、行けないもん。

それなら、親も心配しないよね？
ケガとかなら、動けないもん。

じっと見つめた視線の先は、川。

キラキラと太陽の光を反射して、水面が眩しい。
そっと立ち上がって、水辺に近寄って。

「……………」

水面に指を近づける。

「冷たい……」

指先が痛くなって、川から指先を引き上げる。
その指先に、はあっ、と息を吹きかけてぎゅっと握り締めて。

「——きゃっ！」

がらっ、と足場の石が崩れ、体勢を崩す。

冷たい水の感触が瞬時に頭に浮かび、無意識でか、体を捻る。
慌てて体をばたつかせ、その弾みに後の草むらに倒れこんで。

「……バカ、みたい」

ふう、と溜息をつく、少女。

実際、怖くて、逃げてくるくせに。

ケガしたら、なんて、できるわけがないのに。

川の水は、冷たくて。

思っていたよりもずっと、冷たくて。

ほんの数秒、指を浸しただけで、指先は酷く冷えて、痛んで。

——ほんとに、死にたいなんて、おもったわけじゃ、ないもん。
ただ、ちょっと、学校行けないくらいのケガができたらって——

そう思って、後でじつとこちらをみている犬と、目が合う。

「……ごめん」

したくて、したわけじゃない、ケガを負わされた犬と、猫。

痛みを癒すには、自分で、自力でただ、じつと。

誰も、好き好んでケガするわけじゃないんだよね…

私は、ケガしたら、おうちで。

ママに、病院連れてってもらって、温かい部屋で大人しくして。
でも、おじいちゃんと、猫は……？

病院、連れてってもらえなくて。

私、病院連れてってあげられなくて。

しようと思えば、出来ないことじゃないのに……

ごめん…

少女の目に、涙が滲む。

それだけが、ただ、熱くて。

ぐっと目をつぶって、涙が頬に零れ落ちる、その温かさを感じる。
それは、すぐに、冷たくなって。

ケガ、痛いよー？

ボク、この間爪噛んでたら指もかじっちゃってさ、いたかったもん。

でも、もちろん泣いたりなんてしなかったけどね？
だってほら、ボクはダンディな危険なナイスガイだもん。

そうそう、それに、死んじやいたいなんて。

みたこと、ある？

お葬式って、大変なんだよ。

皆えーん、ってないで、燃やしちゃったら、もう、顔とかもな
いんだもん。

骨だけがぼろぼろってあってさ。

ボク、なんだか見てたら淋しくなっちゃった。

でも、燃やしてあげないと、ニンゲン、腐っちゃうんだって。

温かかったのが、冷たくなって、すごいニオイがして。

どろどろって溶けていって、その頃は臭くて、同じ部屋にいれな
いんだって。

そして、いつか、骨になるんだってさ。

どんなビジンも、腐って、ぶわって膨らんで、最後は骨。
そうなるの、きっと、見てるの辛いよね？

死んじやったら、燃やされても熱くないのかなー？
ボクだったらさー、

あ、でも、ボクは夢見るナイスダンディだからヒミツ。

「それじゃ、私、そろそろ行くね」

犬と猫に吠いて、少女は立ち上がる。

昼にはまだ時間がある、午前中の空気。

かさつと足元で音を立てる落ち葉を踏み分けて、すぐ側の家へ向
かって、少女は帰路に着く。

「ただいま」

といっても、返事がないのは先刻承知の上のこと。

それでも、条件反射というべきか、思わず口にしてドアを閉める。

靴を脱いで、洗面所へ向かい。

手洗いをして、うがいをして。

自分の部屋に戻り、制服をハンガーにかけると、居間に戻る。
留守電があるか、電話をみて、着信がないことにほっとする。

これから風呂を済ませて、それからずっと此处にいてもいいし、
子機をもって部屋に戻ってもいい。

親が帰ってきたら、今日はまっすぐ早めに帰ってきたと言えるばい
い、と言いつつ考える。

旅行の準備で、早くなった、でも。

行きたくはない、旅行。

かといって、断る理由が思いつかない。

積み立てをしてきている親に、それを無駄にするのが申し訳な
い。

毎月の積み立てが戻ってくれば、親が欲しがっていた新しい鞆も
買えるのに、と思って溜息をつく。

「……お風呂、しちやおうかな」

電話の子機を持って、浴場へ向かう少女。

あ、河合さん、これからお風呂？

いいよね、昼間のお風呂。

明るくて、視界はばっちり、湯気でふんわり。

嬉しいな、お外寒かったから早く入ろうよー？

ボクね、頭にタオルまいてさ、お湯につかってるうなじが大スキ。
こう、ぴよーんって後れ毛があつてさ、いいよね、アレ。

思わず引っ張って、指でくるくるしたくなっちゃう。

あ、キミもちよつとされてみたい？

ボクのテクにクラクラしちゃうよ？

だって、危険なセクシーダンディだからね、ボク。

「ふう」

昼間のお風呂って、変な感じ。

電気つけなくても明るくて、あたりまえだけど、外は昼間で。

ゆっくりと湯船につかり、冷えた体を温める。
指先までピンク色に染まり、湯気で満ちた浴室に自分の溜息が響く。

ちやぷん、と湯に手を沈めて、皮膚に少しずつ気泡がついていくのをじっと見つめる少女。

なにか、考えなくては、とも思う。

かといって、何が思い浮かぶわけでもなく。

ただ、温かいその湯に体を浸しては溜息をつく。

んー、たまらないねっ？

やっぱ、お風呂ってボクだーいすきさ。

ピンク色の肌って、すごいイイよね？

ボク、ドキドキしちゃう。

ほっぺたも、うなじもピンク。

うん、オンナノコってやっぱり大スキ。

後れ毛くるくる、したくてたまらなくなっちゃう。

いやん、とかいわれちゃったら、ボク、どうしよー？

ねえねえ、キミならわかるよね、このロマン。

「それじゃ、そろそろでよっかな」

一人、呟いて湯船から出る。

湯から出た途端、ずしんと体が重くなるのを感じて、ほんのわずかにだるさを感じるが、それでも体があたたまるのは心地よい。

どうしようかな。

宿題…もないし、予習…

——明日、学校いきたくないよ…

このまま、いかなくてすむのなら、いいのに。

でも、そしたら、親心配するよね…

体を拭いて、頭を乾かす少女。

未だ湯気がひかない体とは裏腹に、加速して冷えて行く心。部屋着に着替えて、再び溜息をつく。

お弁当、今日はいいよって置いておいて、良かった。

全て学校に置いて来てしまったことを思い出す。

昼飯を購買で買うつもりだったので、お弁当を作ってもらわなかったのは、正解だった。

今から取りにいくなんて、出来そうにない。

再び学校を思い出すだけで、一層心が冷えて行くのを感じる。

戸棚からカップラーメンを出すと、電気ポットから湯を注ぐ。

しゅわつと湯気をあげて、食欲をそそる臭いがふわつと立ち上る、
が。

——…っ。

行きたくないよ…っ

ぽた、と涙が零れ落ちる。

あと、20時間もしないうちに、再び学校にいかなくてはいいけ
ない。

それを思うと、どうしようもなく哀しくて。

立ち上る湯気が温かく、心地よい、が。

ほんの少し顔を背ければ途端にどうしようもなく冷たくなる。

行きたく、ないよ。

行きたくない、よ。

——生きてく、ない…

河合さん、ラーメン伸びちゃうよー。

ボク、シーフード味がスキ。でも、あのうそ臭いお肉の具もスキ。カップラーメン考えた人、すごいよねー？

日本人だって、知ってた？

でも、最初は相当大変だったみたい。

きっかけて、何があるかわからないよねー？

ボク、みにいっておけばよかったな。

今更だけど、ね？

ねえ、河合さん。

ボク、キミの事、見てたよ。

見せてくれて、ありがと。

ほんとほ、お礼するの、もうちょっと後がいいかなって思ってたんだけど。

湯上りで泣いてる河合さん、セクシーだし、うなじ大スキだし。ちょっと早いんだけど、お礼、しよっかな。

イイ、と、ワルイ、ボクにはやっぱり難しいや。

オトコノコの密林ジャングルはちよつとアレだけど。

夢にでてきちゃって、ボク、困っちゃった。

それじゃ、河合さん、ボクのお礼、受け取って。

「もお…やだ…」

河合さん、顔あげて。
ボク、お礼するから。

「…え…？誰…？」

あ、ごめんごめん、自己紹介してなかったよね？
うん、びっくりしないでーっていつても、するよね？
大丈夫、ボクはセクシーナイスダンディ。

今まで、ずっと、河合さんみてたの。
それで、みせてくれたから、お礼しなくちゃって思っ

「今まで…？」

うんうん、湯上りピンク……じゃなかったっ。
えーっと、ほら、ね、そのっ。
ま、まあ、お礼するから受け取ってよ。

「お礼…って、お礼って、なに？」

お礼はお礼っ。
ボク、イイ、と、ワルイ、が、こういうものか知リたかったの。
でも、これ以上は言えないよ。

だって、ボクは秘密のナイスガイだからね。

「それって」

ううん、ダメ。

これ以上は質問きーんしっ！

だって、ほら、秘密があるオトコって、素敵でしょ？

ボクのこと考えてクラクラするオンナノコがたくさん。
うーん、ボクって罪作り。

それじゃ、いくねっ。

ボクからの、お礼。

喜んでくれたら、嬉しいな。

キンコンカンコン。
始業を告げる、鐘の音。

「おはよー！」

「おはよー、…って、河合、アゴにジャムついてるよ？」

「……え……？」

親しげに話しかけてくる、二人の少女。
そして、ここは、朝の校庭。

え、なに…？

どうして？私、家にいたよね…？

それに、…

「あ、これこれ、昨日買ったんだけどすごいうまいの！食べてみて！」

そういつて、鞆から菓子を出す少女。

どうしたとか、と立ち止まる河合を不思議そうに見つめて、

「どしたの？」

「あの…」

声を掛けると、にこっと笑って菓子を差し出す。
泥もついていない、汚れてもいない、その菓子。

「…ね、ねえ…、どうしたの…？」

「んー？」

「なになに、河合、寝ぼけてるー？昨日一緒に買い物いったじゃん？」

そういつて、可愛らしいペンを見せてくる、もう一人の少女。
胸元に刺してあるそれは、菓子をわけてくれた少女の胸にも、そして

「私も…？」

河合の胸元にも。

昨日、買い物……？

あれ……

昨日、昨日、昨日……

学校……

「やだー、ちゃんとねた？」

「昨日、学校終わったら一緒に買い物いったじゃん？修学旅行の買い物行こうって。」

修学旅行……？

あれ、そうだった……？

確か昨日は、……川辺で……

あれ……何が、あったんだ……？

困惑して考え込む河合の肩をぽんぽんと叩く二人の少女。
その少女の目には、純粋にこちらを気遣う様子が伺える。

「修学旅行、一緒に……？」

「ちよっとー、どうしたの？」

「一緒に回ろうって約束したじゃん？」

「一緒に……？」

二人に、口々に言われて。
一緒に修学旅行で、回る？

「じーちゃんと、ケンタにお土産かうんでしょ？」

「じーちゃんと、ケンタ…？」

言われて、聞き返す。

誰のことだか、検討がつかない。

私に、おじいちゃんは、もういないはず。

ケンタ、…：親戚にも、いないよね…：？

「ちょっと、ほんとどうしたの？」

「河合ん家のおじーちゃん犬と、子猫でしょ？名前、間違えた？」

そう、おじいちゃん犬と、子猫。

名前つけてあげなくちゃって…：そうだよね…：？

「おじいちゃんと、ケンタ…」

「うんうん、可愛いお洋服かってあげるんでしょ？」

「うちのチョコにもかってあげなくっちゃ、一緒にいこうねっ！」

そっか、おじいちゃんと、ケンタ。

名前、つけたんだっけ…

修学旅行、行って、お土産買わなくちゃ。

一緒に…

一緒に…？

「一緒に…？」

「あつたりまえじゃーん！なにに、イヤなのっ？」

「えー、そりゃないでしょーっ、友達じゃんっ！」

友達。

友達…？

「友達…」

「でしょ？」

「ちがうのー？」

笑って河合の手を握る、二人の少女。

二人とも、にっと笑って、首をかしげて、自分を見ている。

「うん、友達…」

友達。

私の、友達…。

「そ、友達でしょっ！」

「やーん、朝からうちら、ラブラブじゃん！」

二人に微笑まれて、おずおずと、笑顔を返す河合。

ほんの少しあった違和感が、ほんの少しずつ、馴染んでいくのを感じる。

キンコンカンコン

「あ、やばっ！はしるよっ！」

「続きは休み時間にねっ！」

二人に昇降口へと手を引っ張られる。

「うん、仲良し」

小さく呟いて、彼女は自分の足で、走り出した。

うん、そうだよ。
良かったね。

ボク、いいものを見せてもらったし。
おじいちゃんも、ネコも、あったかかったってさ。
ケンタって名前、悪くないとおもうよ。

おじいちゃんも、それでいいってさ。

さて、まだまだボクは、お礼してこなくっちゃ。

ハ―イ、こんばんわっ。

「は？」

「なんかきこえたんだけど？」

ボク、ナイスガイ。

キミたちにも、見せてもらったお礼にきたよっ。

「つか、誰？」

「なに、なんかおかしくない？」

うん、びっくりするのは仕方ないよね。

それもミステリアスってやつだから、ボクの魅力ってことで。

「はあ？」

「頭おかしいんじゃない？超ウザイんだけど」

それじゃ、ボクキミ達にお礼するの。

やっぱり、イイ、と、ワルイ、ボクよくわからなかったからさ。

「あー、なんかムカツク。うるさいんだけど」

「うぜー、なにコレ」

キミ達の、スキなの、あげるね。

「なに、なにくれんのー？」

「バカにしてんじゃね？ウザイから消えて」

うん、キミ達がよく言ってる、「ウザイ」って言葉。きつと、大スキだから、よく使う言葉なんだよね？

だから、ボク、キミ達に「それ」あげるねっ？

キミ達が言ったのと同じ回数、同じだけ、プレゼントっ！
今までの分も、これからも、ちゃんとして返って来るようにしてあげる。

「は？ウザイんだけど」

「マジ死ねって、お前ウザイ」

うん、やっぱり大スキなんだね？
よかった。

まずは、今の二つから、ボクのお礼、うけとってねっ？

これからどうなるか、ちょっと見届けてあげたいんだけど。
ボク、まだいかなくちゃいけないところあるから、ごめんねー？

「はあ？ワケわかんねー」

「つかさー、アンタウザイんだけど」

「お前もウザイっつーの、どっかいけよ」

「なんでこんなヤツと居たんだろ、コイツ超イタイわ」

まずは、二人でよかったねっ。

それじゃ、バイバーイ。

喜んでくれたら、嬉しいなっ。

さてと、それじゃ次はっ。

「って、なにこれ」

えー、コレって言われちゃうと、ボクちょっとガツカリ。
セクシーナイスダンディって言ってほしいんだけどな。

「うわ、しゃべるし」

うん、そりゃしゃべるよ？

ねえ、ボク、キミにもお礼にきたの。

「わけわかんないんだけど、なんなの？」

んー、そうだね、ボクもよくわかんないや。

キミのことずっと見てたわけじゃないし、お礼、なにがいいかな
ー。

「はあ？」

キミは、見てただけだね？

うん、そう、見てただけ。

直接何か言ったわけじゃないしー、笑ってみてただけ。

うーん、お礼、何がいいかなー？

「意味わかんないから、なんなの？」

そうなんだよねえ、ボクもよくわかんない。

だけど、お礼しないで帰るって、それはダメダメ君だもん。
ナイスダンディで、礼儀ただしく。

うん、ほら、やっぱりボクって出来てるよねっ？

「ほんとわけわかんない。どっかいつてくれない？」

あれ、クラクラしてない？

あ、わかった。

ツンデロ、ってやつだね、きっと。

うん、ボク物知りだから知ってるよっ？

ツンデレ、だっけ？

まあ、どっちでもいいや。

それじゃ、キミにも同じお礼でいっかな。

「お礼ってなんなのよ」

キミ、ただ見て笑ってただけだもんね、うん。

「だからなんなのよ、何もしてないからね」

じゃあ、キミにも、それ、あげる。

キミになにかあったとき、ただじつとみて、笑ってもらえるように。

ただ、そこにいて、キミがしてきたのと同じように。

「はあ？」

「てか、アンタなに一人でさっきからブツブツいつてんの？」

「え、聞こえない？」

キミが、困ってる時も、ただ、じっと見て。

キミがしてきたのと同じように、してもらえるように、してあげるねっ。

声を掛けてきたクラスメート。

彼女には何も聞こえていないのだろう、此方の様子を訝しがるように見ている。

ね、お礼、うけとってねっ。

「だから、いらないうって。わけわかんないっていつてんじゃん」

「いや、ワケわかんないのこっちだから。どうしたの？」

「ちよっと、ほんとに聞こえない？」

「…アンタ、どうしたの？」

周りでは、じっとこっちの様子をみて、ひそひそと話し始める声。声を掛けてきたクラスメートも、半歩ほど後ずさり、眉をひそめている。

「なんでもないから」

「ちよっと、キモイよ？」

「なんでもないっていつてんじゃんっ」

それじゃ、ボクいくね、またねー？

「ちよっと、なんなのよ！」

「ほんと、アタシがききたいんだけど。アンタどうしたの？」

「なんでアンタ聞こえないわけ！？ほら、いるじゃん、そこに！」

あ、無理無理。

だってボク、ステキなナイスダンディだからさ。

普通に皆、ボクみたらクラクラしちゃうでしょ？

忘れられなくて、眠れぬ夜。

うーん、お肌の天敵。

そんなこと、ボクできないさ。

「真面目にきいてんのよ！」

「……アンタ、おかしくない？」

「なんなのよ、ほんと！」

「……」

無言で去っていくクラスメート。

すぐ側で、此方をみてひそひそと話していた中に戻っていく。

それじゃ、またねー！

お礼、喜んでくれたら、うれしいなっ。

「ちょっと!」

「あいつ、やばくね?」

「おかしいって、ぜってー」

「最近なんかちょーしこいてるし」

小さく囁かれる声。

それが、隣人へと移るたびに同意になり。

「つか、前からなんかむかつくと思ってたんだよねー」

「あー、わかる、なんかウザイよね」

顔を上げたその瞳に映るのは。

「アイツ、放置でよくね?」

「いんじゃない?」

薄笑う数人のクラスメートの視線。

こちらを見て、にやりと笑って。

目があうと、再びそらし、隣人とひそひそと。

「ちょっと! ちょっとまってよ! ! ! !」

「まだやってるよ、イタすぎ」

「だから放置だつてー」

囁かれる声ははっきりと耳に。

それに慌てて立ち上がり、クラスメートに向かって、
向か
って叫ぶ少女。

「ねえ、あたし何もしてないじゃん!!!」

んー、ボク、いかなくちやなんだけどなー？
デートに遅れるオトコはダメなんだよ？

ま、デートじゃないんだけどさ。
あ、ちよつと期待しちゃった？

ボクってば罪作り、うーん、やっぱりダンディ。

うん、キミは何もしてないよね？
だから、ボク、それあげる。

キミに何があっても、キミがしていたように。
キミが何か言っても、キミがしてきたように。

「ちよつと!!!」

うん、もうちよつと話してたいんだけどさ？
あ、逢瀬っていうんだっけ？

雰囲気ゾクゾク。
知性のあるダンディってイイよね？

これからボク、知性なカレシに会いに行くの。

カレシ、っていつでも、ボクのカレシじゃないからね？

引き止めてたいオトメゴコロ、ちょっといいけど、またいつか。だってボクはセクシービジネスマンなのさ。

さてと、うん、結構大変。

でも、ここで帰っちゃナイスダンディの名がすたるってやつさ。だから、ボク、がんばらなくっちゃ。

もちろん、クラスの皆にも、ちょこっとずつ見せてもらったぶん、ちょこっとずつお礼するねっ。

順番だから、時間差できちゃうけど、ごめんね。

でも、ちゃんと全員にするから、いいこでまってるね。

さてと、次は、みんなの憧れ、桜井君のといこっかなっ。

「またトップ佐川かよ…クソ」

呟いて、ライターを取り出す桜井。

足元の草を蹴り飛ばし、唾を吐くと、周りを見回す。

誰も居ないことを確認すると、煙草に火をつけると、煙を吐く。
薄暗い夕方の川原はとても静かで、土手の向こう側に行き来する
車の音が遠く聞こえるだけだ。

「やってらんねーっつの」

そう、呟いてふと頭上を見上げると、そこには鳥の巣が。

枯れ草を編んで作られたような形のそれは、既に雛鳥はいなく、
また季節が来れば、そこには卵が、そして、雛鳥が。

そして、またいつか、巣立っていくのだろう。

「バカじゃねーの、虫とか食って生きてくとか」

忌々しげに吐き捨てる、少年桜井。

足元から石を拾って、それにむかって投げつける、がうまく当たらない。

桜井君、お礼っ。

ボク、やっぱり、いい、と、ワルイ、わからなかったの。

だからね、同じことが起こるようになって。

してあげたことが、自分にちゃんと戻ってくるようになって。

ボク、こないだおじいさん荷物重そうなの、持ってあげたの。
ボクが重いものもってたら、誰か手伝ってくれたら嬉しい。

うん、ボクってば、やっぱりかしこいよねっ？

おじいさん、喜んでくれてたし、ボクってばいいコ。

いい、と、ワルイはわからなかったけど、十分ボク、満足っ！
きっと、皆も喜んでるよね？

「なんで当たらないんだよ」

再び、石を拾って投げようと振りかぶる、少年桜井。
その、足元から。

「！！！」

なにか、が少年の体を掴む。

「な、なんだっ!？」

必死になって自分の体を掴んでいるなにかを振り払おうとするが、何も、ない。

さらに、触った感じすら、ない。

「……っ!」

何もないはずなのに、なにかが体を掴む感触が離れない。
唾を吐いてみるが、自分の服を汚すだけだ。

「…なっ!」

その、指先が。
その、背が。

「うわああああああ!!!!!!」

じわっと、血が滲んで、鋭い痛みが。
何かが直撃するような、鈍い痛みが。

「誰か! 誰かああああっ!!!!!!」

ゆっくり、ゆっくりと肉をえぐられていく感触が、痛みが。
肉を断ち切られ、神経が遮断され、血管から血液が体外に排出され。
れ。

そして、それはゆっくりと体の内部に侵入していき、やがてその、
白い骨に、何かが触れ、関節が無理な方向へと捻じ曲げられ、

……バキッ

真っ二つに折れて。

「うわあああああああ……！！！！！！」

ぼとり、と、草むらに、体の一部であったそれが、落下した。

「誰か！誰かあああああああ！」

ねえ、桜井君は、何をしたの？

それ、が、桜井君のされたいことだったの？
頭イイ桜井君、イイ、と、ワルイってわかる？
ボク、痛いノスキじゃないからわからないや。

うん、ニンゲンって、奥が深いよね。

いつか、ボクにもわかるようになるのかな？

イイ、と、ワルイ、キミはわかる？

他の皆にも、お礼しなくっちゃ。
ちゃんとお世話になったら恩返し、ボクって律儀。
うん、ちゃんと皆にお礼するよ？

ボク、かえっちゃったら淋しい？

んー、やっぱりボクって罪作り。
でも、大丈夫っ。

皆ボクにメロメロなのはわかってるから、時々見に来るよ。
そして、また、お礼してあげる。

いつか、イイト、ワルイ、ボクにもわかるかな？

ねえ、キミは、わかる？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4280b/>

ココロノヤミ

2010年10月11日08時04分発行